

アラビア語を母語とする日本語学習者の グループディスカッションに現れるフィラー

アヤ ムハマド ファトヒ ムハマド ザグルール*

Fillers Used in Group Discussions by Arabic-Speaking Japanese Language Learners

Aya Mohamed Fathy Mohamed ZAGHLOUL

Abstract

This paper aims to analyze different fillers (types, position) used in group discussions by Japanese language learners whose mother tongue is Arabic. The result of the analysis revealed that Japanese language learners, whose mother tongue is Arabic, used 8 different types of fillers. Among them, the most frequently used ones were “KO, SO, A” type fillers, “Vowel” type fillers and “Nanka” type fillers. Non-Japanese fillers also appeared in the learners' utterances. As for the position of the fillers, the results showed that fillers were used in three different positions in the utterances. Fillers were used most frequently in the middle of the utterance. They weren't used a lot in the head of it and only a few fillers appeared at the end of the utterance.

Keywords : fillers, group discussion, Arabic, Japanese language learners, frequency of appearance

1. はじめに

日本語母語話者の自発的な発話では、「ええと」「ええ」「まあ」「なんか」などといった談話中の沈黙を埋める語、いわゆるフィラーが頻繁に使用され、これは日本語母語話者による発話の特徴的な現象の一つであるとされる。フィラーは「それ自身命題内容をもたず、かつ他の発話と狭義の応答関係・接続関係・修飾関係をもたない、発話の一部を埋める音声現象」と山根（2002：49）により定義されている。フィラーは、たとえ削除されたとしても、文の命題の意味は変わらない。しかし、フィラーは発話の中で重要な役割を果たし、様々な機能を持っている。一般的には会話がスムーズに進まなかったり、適切な表現が思い浮かばなかったりした場合、「あのう」のようなフィラーを使うことによって、沈黙を避けることができる（ルカムト, 2013）。

日本語を学ぶ外国人が増加しつつある現在では、自然な日本語ができるようになることを目指す日本語学習者は少なくない。そうした自然な日本語を習得するためには、フィラーの適切な使用が重要になると思われる。しかし、日本語教育の観点からフィラーを扱った先行研究はまだ少なく、さらにフィラーを取り扱う日本語教材もほとんどない。一般的にアラビア語圏の学習者は日本人と接する機会も限られており、日本語のフィラーについて経験から学ぶ機会が少なくない。また、母語のアラビア語にもフィラーはあるため、母語のフィラーと日本語のフィラーについて、使用法の違いを知っておくことも重要であろう。このようにアラビア語を母語とする学習者のフィラー使用についての知見が必要とされているにもかかわらず、これまでにアラビア語を母語とする学習者を対象

キーワード：フィラー、グループディスカッション、アラビア語、日本語学習者、出現数

*平成31年度生 比較社会文化学専攻

としてフィラーを分析した研究はほとんどなく、基礎研究が必要である。従って、本研究ではアラビア語を母語とする日本語学習者の発話におけるフィラーの使用状況（型別・種類別の出現数、位置別の出現数）を明らかにすることを目的とする。そのような研究を通して、日本語教育分野におけるフィラー教育にも貢献できると考えられる。

2. 先行研究

2. 1 日本語母語話者を対象者とするフィラーの先行研究

フィラーに関する研究は多くはないが、近年徐々に増えつつある。フィラーの種類に関する論考としては、山根（2002）、中島（2011）が挙げられる。

山根（2002）は留守番電話や講演、電話対話、対面対話の談話データを分析し、そこに現れるフィラーの特徴、種類、役割、出現位置などを明らかにした。山根（2002）はフィラーの類型を「母音型」「エート型」「コソア型」「コーソ型」「マー型」「モー型」「ナンカ型」「ハイ型」「ネー型」「ンー型」の10型に分類している。また、フィラーの出現位置について検証し、その結果から発話途中にフィラーが多く現れたことを指摘した。具体的には、講演では発話途中のフィラーが（90.2%）であり、対話では（71.3%）であり、留守番電話では（52.8%）であり、電話発話では（49.1%）であった。講演の発話途中のフィラー出現率が最も高い理由は、話し手が長い間発話権を保持する必要があるためだとしている。それに加え、フィラーの型別について山根（2002）は「談話の種類とフィラーはかなり密接な関係にある」（p.231）と述べた。山根（2002）が目にしたのは「母音型」の「エー」が対話と留守番電話の談話のような、聞き手と距離感のある独話で見られることである。また、「母音型」の「ア」と「エート型」は物理空間を共有しないメディアを媒介とする留守番電話や電話のような談話に見られる。「マー型」と「コー」は講演や対話のような聞き手と対面しているために配慮が必要な談話に見られる。このように山根（2002）は談話の種類によってフィラーの型別が異なることを明らかにした。

中島（2011）は自然談話に現れるフィラーの種類とその類型、出現率及び出現順位について述べ、発話中のフィラーの出現位置とその機能等について言及した。中島（2011）によれば、フィラーは発話頭、発話途中、発話末によって出現種類と出現数が異なる。発話頭に出現する傾向が高いフィラー、発話途中に出現する傾向が高いフィラー、発話末に出現する傾向が高いフィラーがある。出現位置による現れ方については中島（2011）に詳しい。中島（2011）によると、「母音型」の「あ」、「ああ」、「え」、「エート型」の「ええと」、「デ型」の「で」、「でー」、「ンー型」の「んー」、「ううん」は発話頭のほうに多く、「コソア型」の「あの」、「あのう」、「その」、「そのう」、「この」、「このう」、「こう」、「そう」、「ナンカ型」、「母音型」の「ええ」、「マー型」、「モー型」、「ホラ型」は発話途中に多く現れる。「はい」、「ええ」、「うん」は発話頭と発話末に出現する。それに、「あの」、「あのう」、「え」、「ええ」、「なんか」、「もう」、「ほら」なども発話末に多く見られるという。このように日本語母語話者が使用するフィラーの位置別の出現の仕方が明らかにされた。

本研究でデータとするディスカッションの談話ではどのようなフィラーの型別・種類別・位置別が見られるのか分析する必要がある。特にアラビア語の学習者では、アラビア語には日本語の「あ」の発音に近い文字や、日本語の「え」の発音に近い文字があるため、母語の影響で母音型のフィラーが見られることが予想される。また、本研究の学習者は母語と異なる言語でディスカッションする際、自分の意見を述べる時、発話権を保持しようと発話途中にフィラーを使用することも予測されるため、この点についても検討する必要がある。

2. 2 日本語学習者を対象者とするフィラーの先行研究

フィラーを日本語教育の観点より考察した先行研究としてはルカムト（2013）と周（2012）が挙げられる。ルカムト（2013）は、日本語のフィラーを学習者に教える必要性を強調し、「あの」「その」「この」「ええと」「なんか」「まあ」という6つのフィラーを研究対象として考察を行った。ルカムト（2013）によれば、フィラーである「あの」「その」「この」「ええと」「なんか」「まあ」を使うことにより円滑なコミュニケーションが営まれ、会話中で発話権を取ったり、または保ったり、話を理解しやすくしたりするという。周（2012）は日本語母語話者と中国人日本語学習者を対象にフィラーの使用回数及びカテゴリーを統計的に処理し、フィラーの特徴に関し

て考察した。その結果、①日本語母語話者、中国人日本語学習者ともにフィラーを多く使っている。②日本語母語話者が使ったフィラーの数は、中国人日本語学習者よりずっと多い。③日本語母語話者がより多用しているフィラーは、中国人日本語学習者も多用しているが、日本語母語話者ほど多くは使わないということがわかった。一方、日本語母語話者がそれほど多く使っていないフィラーを中国人日本語学習者がよく使っていることが明らかになった。

このように日本語母語話者と中国を母語とする学習者が使用するフィラーの特徴が明らかになったが、アラビア語を母語とする学習者が使用するフィラーについての研究はほとんどない。

3. 研究課題

本研究では、アラビア語を母語とする日本語学習者のフィラーの使用実態を把握するため、次のように課題を設定する。

研究課題1 アラビア語を母語とする日本語学習者が使用するフィラーの型別・種類別の出現数はどのくらいか。

研究課題2 アラビア語を母語とする日本語学習者が使用するフィラーの位置別の出現数はどのくらいか。

4. 研究方法

4. 1 調査概要

本研究の調査の対象者はエジプトにある大学の日本語学科4年生であり、日本語中上級者の8名である。調査の手順は、学習者を4人ずつの2つのグループに分けた上で、それぞれのグループにテーマを提示し、録音しながら10分程度日本語でディスカッションをするよう求めるというものである。テーマは会話の授業において以前扱った話題に基づき、「学生時代は勉強だけに熱中し、アルバイトなどはしないほうがいいか」とした。ディスカッションでは、グループのメンバーにそれぞれ賛成か反対かの立場で、自分の意見を言うように依頼した。グループ1の録音時間は9分26秒であり、グループ2の録音時間は9分34秒であった。調査が終了した後、録音したデータを宇佐美(2011)の「基本的な文字化の原則(BTSJ)」に従い、文字化を行った。この文字化されたデータに基づき、分析を行った。

4. 2 フィラーの型、種類、位置の分析方法

本研究では、山根(2002:49-51)及び中島(2011)の分類方法を一部修正して分析を行う。また、'um'、'mm'、'er'、'err'(Ward, 2006)の非日本語のフィラーがデータに出現したため、それを分析対象に含めることとする。本研究の分類方法を以下の表1に示す。

フィラーの位置については、本研究ではアラビア語を母語とする日本語学習者のフィラーを中島(2011)に倣

表1 フィラーの型と種類

フィラーの型		フィラーの種類
1	母音型	「あ」「い」「う」「え」「お」「あー」「いー」「うー」「えー」「おー」「あっ」「えっ」
2	エート型	「ええと」
3	コーソー型	「こう」「こうね」「そう」「そうね」「そうですね」「そうだね」
4	コソア型	「このう」「そのう」「あのう」「あのね」「そのね」
5	ナンカ型	「なに」「なんか」「なんというか」「なんという」
6	ネー型	「いや」「ね」
7	ハイ型	「はい」「ほん」「ふん」
8	マー型	「まあ」「まあね」
9	モー型	「もう」「もうね」
10	ンー型	「ん」「うん」
11	非日本語フィラー	'um' 'mm' 'er' 'aum'

い、発話頭、発話途中、発話末に分けて考察する。

5. 結果と考察

5. 1 課題1の結果と考察

5. 1. 1 フィラーの型別の出現数の結果

アラビア語を母語とする学習者が使用したフィラーの型別の出現数は、10種類の中の7種類であり、他に非日本語のフィラーとあわせると、8種類となる。この8種類のフィラーの全出現数は210回であった。具体的に見ると、学習者のフィラーの型別では、最も多かったのが「コソア型」で47回(22.4%)、続いて「母音型」44回(21%)、「ナンカ型」36回(17.1%)、「マー型」23回(11.0%)、「エート型」22回(10.5%)、「ネー型」10回(4.8%)、「ハイ型」4回(1.9%)の順に出現していた。他に非日本語のフィラーが24回(11.4%)が出現した。「コーソー型」、「モー型」、「ンー型」は出現しなかった。

5. 1. 2 フィラーの型別の出現数の考察

以上の結果からは、先行研究との共通点及び相違点がみられる。まず先行研究の周(2012)と同様の結果があった。それは「コソア型」と「母音型」の使用である。本研究で対象としたアラビア語を母語とする学習者は、「あ のう」を含む「コソア型」、「母音型」、「ナンカ型」を多用していることがわかった。周(2012)は中国人の日本語学習者が「コソア型」の「あ のう」、「母音型」の「あ」などのフィラーをよく使用することを明らかにしており、「コソア型」と「母音型」については本研究の結果と一致している。

しかし、先行研究とは異なる結果もあり、それは「ナンカ型」と「マー型」の使用であった。中国人の日本語学習者を対象にフィラーの使用実態を調べた周(2012)の研究結果では「まあ」を含む「マー型」、また「なんか」などの副詞からできている「ナンカ型」のフィラーは、日本語学習者にとって「把握しにくいもの」と指摘しており、中国人の日本語学習者はあまり使用しないことがわかった。一方、本研究のアラビア語を母語とする学習者では「ナンカ型」のフィラーは多用されており、「マー型」の使用も多く見られた。

最後に、本研究のデータに現れなかった「ンー型」についても、先行研究とは結果が異なっている。周(2012)は、中国人の日本語学習者が「ンー型」の「んー」のフィラーを多用することから、これらは日本語学習者にとって「より理解しやすいフィラー」であると指摘している。しかし、本研究では「ンー型」は出現しなかった。これらのことを総合すると、日本語学習者が母語により、フィラーの使用傾向が異なる可能性があると言える。

5. 1. 3 フィラーの種類別の出現数の結果

アラビア語を母語とする学習者が使用したフィラーの種類別の出現数は、「あ」1回(0.5%)、「あっ」2回(1.0%)、「ああ」4回(1.9%)、「え」9回(4.3%)、「えっ」3回(1.4%)、「ええ」25回(11.9%)、「ええと」22回(10.5%)、「このう」2回(1.0%)、「そのう」7回(3.3%)、「あ のう」38回(18.1%)、「なんか」30回(14.3%)、「なんという」3回(1.4%)、「なんというか」3回(1.4%)、「まあ」23回(11.0%)、「はい」3回(1.4%)、「うん」1回(0.5%)、「いや」10回(4.8%)、非日本語フィラーの‘um’5回(2.4%)、‘mm’10回(4.8%)、‘err’8回(3.8%)、‘aum’1回(0.5%)であった。

以上をまとめると、「あ のう」が38回出現しており、最も多く使用されていた。次に、2番目に多かったのは「なんか」30回(14.3%)であり、学習者に多用されていた。その他に目立ったフィラーとしては、「ええ」(11.9%)、「まあ」(11%)、「ええと」(10.5%)の3種が挙げられた。「あ のう」、「なんか」「ええ」、「まあ」、「ええと」の5種は合計138回出現しており、全体の65.8%を占めた。つまり、アラビア語を母語とする学習者が使用したフィラーの6割以上は「あ のう」、「なんか」、「ええ」、「ええと」、「まあ」ということがわかった。

5. 1. 4 フィラーの種類別の出現数の考察

ここでは、本研究の結果と母語話者を対象とした先行研究とを比較し考察を行う。本研究の日本語学習者のデータにも「あ のう」が最も多く見られ、2割近くを占めた。この結果は母語話者を対象とした中島(2011)と山根

(2002)の結果と一致する。中島(2011:185)によると、自然談話録音資料の6000発話中に得られたフィラーの出現数・出現率を分析した結果、最も多かったフィラーは「あのう」305回(18.7%)である。同じく母語話者を対象とした山根(2002)の研究によると、対話における「フィラー」の出現回数の上位にも「あのう」(37.2%)が最も多く出現したという。

一方、本研究と母語話者を対象とした先行研究との違いもある。本研究でのアラビア語を母語とする学習者の発話には「で」のフィラーが全く出現しなかった。また、「あ」も非常に少なかった。しかし、中島(2011)のデータでは、日本語母語話者の発話には「あ」が136回(8.3%)、「で」が126回(7.7%)出現したとのことである。要するに本研究で対象としたアラビア語を母語とする学習者は母語話者と同様に「あのう」を多用するが、日本人母語話者がより多用するフィラー「あ」や「で」はそれほど使わないということが見られた。

5. 1. 5 先行研究の分類にないフィラーについての考察

今回のデータにおいては、先行研究で指摘されたフィラーとしてはあまり使われていないものが見られた。まず、フィラーの「ナンカ型」の「なんですか」の使用として次の例1が挙げられる。

発話例1

65	AJL 6	もう こ この 学生時代 学生 子供の時は 勉強だけ 勉強と遊ぶ <u>なんですか</u> ええと ええと 大人になると、勉強以外に し アルバイトとか活動とかが必要、
----	-------	--

以上の例1では、学習者が子供の時は勉強することと遊ぶことだけをすれば良いが、大人になれば、アルバイトやその他の活動をする必要があるという意見を述べている。その際、発話途中に「ええと」と「なんですか」が出現した。「ええと」は日本語の話しことば上でフィラーとして用いることが多いが、「なんですか」はフィラーとしてあまり使われないようで、これをフィラーとして扱った先行研究は管見の限り見当たらない。

次に、非日本語フィラーの使用である。日本語で発話する際に外国語のフィラーが使われているものは非日本語のフィラーと呼ぶことにした。上述の日本語のフィラー項目に加え、本研究のデータには学習者の発話において非日本語のフィラーが出現した。以下の例2が挙げられる。

発話例2

7	AJL 5	なんか アルバイト, <u>um</u> たぶんアルバイトだけじゃなくて, 例えば どの一ような活動 (沈黙0.2秒) でもしたら なんか 勉強だけに熱中することより いいと思います。
---	-------	--

以上の例2では‘um’の非日本語のフィラーが日本語のフィラーと混ざって使用されている。このように日本語で発話する際に非日本語のフィラーが使われると、日本語の自然さにも影響すると思われる。

次に、一つの発話におけるフィラーの多用について述べる。本研究では、フィラーの指導を受けていないにもかかわらず学習者が様々なフィラーを使用する様子が見られたが、一つの発話においてフィラーの多用も観察された。その多用については次の例3が挙げられる。

発話例3

23	AJL 4	アルバイト少ないと思います。
24	AJL 1	ないです。 エジプトの人は、
25	AJL 3	er あり、, ありますが、 <u>あのう</u> <u>そのう</u> <u>そのう</u> , 人の <u>ま</u> <u>err</u> のレベル <u>まあ</u> みんな er <u>あのう</u> <u>そのう</u>

上記の例3ではAJL 3の25番の発話において多くのフィラーが出現している。一つの発話におけるフィラーの多用は言語能力の不足による言い淀みの可能性もあるが、山根(2002:237)がいう「迷惑信号」になってしまうおそれがあり、尾崎(1981:50)のいう「マイナスの印象」を与えかねないような多用であると考えられる。

一つの発話においてフィラーを多用すると、聞き手の発話の内容に対する理解を妨害することがあることを指導していくことが重要であると考えられる。

5. 2 課題2の結果と考察

5. 2. 1 フィラーの位置別の出現数の結果

研究課題2の分析は、フィラーの出現位置の分析である。ここでは、本データにおけるアラビア語を母語とする学習者の発話に出現したフィラーを発話頭、発話途中、発話末という3つのカテゴリーに分け、出現数をまとめた結果を以下の表2に示す。

以上の表2ではアラビア語を母語とする学習者は発話頭、発話途中、発話末という3つの位置すべてにフィラー

表2 アラビア語を母語とする学習者のフィラーの位置別の出現数

フィラー	発話頭	発話途中	発話末	計
あ	1	0	0	1
あっ	1	1	0	2
ああ	2	1	1	4
え	3	6	0	9
えっ	2	0	1	3
ええ	4	20	1	25
ええと	10	12	0	22
このう	0	2	0	2
そのう	1	5	1	7
あのう	8	28	2	38
なんか	7	22	1	30
なんという	0	1	2	3
なんというか	0	2	1	3
まあ	7	16	0	23
はい	0	0	3	3
うん	0	0	1	1
いや	7	3	0	10
um	0	5	0	5
mm	3	7	0	10
er	1	6	1	8
aum	0	1	0	1
計	57	138	15	210
率	27.1%	65.7%	7.1%	100%

を使用したことがわかった。フィラーが学習者により最も使用された位置は発話途中の138回であり、65.7%に上った。発話頭のフィラーは発話途中のフィラーに比べるとそれほど多くはなく、57回で27.1%であった。最も少なかったのは発話末のフィラーであり、15回で7.1%にすぎないという結果が出た。

5. 2. 2 フィラーの位置別の出現数の考察

まず、学習者が発話頭で使用したフィラーには「ええと」(10回)、「あのう」(8回)、「なんか」(7回)、「まあ」(7回)などがあった。「ええと」、「あのう」、「なんか」、「まあ」などについては、中島(2011)でも、日本語話者の発話頭に表れるという指摘があり、それに加え、発話を開始する合図として働く「はい」が発話頭に現れると示した。しかし、学習者の発話頭に「はい」が見られなかった。一方で、学習者の発話頭に「いや」(7回)使用された。

次に発話途中に現れたフィラーについて具体的に見ていく。学習者は発話途中に「あのう」(28回)、「なんか」

(22回)、「ええ」(20回)、「まあ」(16回)、「ええと」(12回)の5種類を多用する傾向が見られた。日本語母語話者を対象とした中島(2011)は指摘したように、「コソア型」の「あのう」、「あの」、「そのう」、「母音型」の「ええ」、「え」、「マー型」の「まあ」、「ま」、「エート型」、「ナンカ型」が発話途中のほうに多いということを示した。本研究の結果はそれと類似している。しかし、中島(2011)では発話途中に出現するフィラーのうちで母音型の「あ」、「あっ」、「ああ」が話し手の気づきの表出として日本語母語話者により使用されているが、学習者の発話には「あ」が出現せず、「あっ」と「ああ」が非常に少なかった。

最後に発話末については、学習者が発話末で使用したフィラーには、「はい」(3回)、「あのう」(2回)、「なんという」(2回)、「ああ」(1回)、「えっ」(1回)、「ええ」(1回)、「うん」(1回)などがあった。このうち、「はい」、「あのう」、「ええ」、「うん」については、中島(2011)でも発話末で使用されることが指摘されており、日本語母語話者と学習者の使用方法に違いはない。一方、中島(2011)では日本語母語話者は「なんか」、「でー」、「もう」、「こう」、「ほら」を発話末で使うことが見られたが、本研究のアラビアを母語とする学習者の発話末ではそのフィラーが現れなかった。

6. まとめと今後の課題

本研究は、アラビア語を母語とする学習者を対象とし、フィラーの使用状況(型別の出現数、種類別の出現数、位置別の出現数)を明らかにした。ディスカッション形式での調査を実施した結果、本研究で対象としたアラビア語を母語とする学習者8名が使用したフィラーの類型は、「コソア型」、「母音型」、「ナンカ型」、「マー型」、「エート型」、「ネー型」、「ハイ型」、非日本語のフィラーの8種類のフィラーのみであることが分かった。型別に見ると、その中で特に多く使用されたのは「コソア型」、「母音型」、「ナンカ型」であった。フィラーの種類に関しては、「あのう」と「なんか」が最も多く使用されているという特徴が見られた。加えて、「ええ」、「まあ」、「ええと」が多く使われた。さらにフィラーの位置については、先行研究に沿って発話頭、発話途中、発話末の3つの位置におけるフィラーの使用について分析したところ、最も多く使用された位置は発話中であり、発話頭はそれほど多くはなく、最も少なかったのは発話末のフィラーであった。発話頭に出現したフィラーとして、「ええと」、「あのう」、「なんか」、「いや」が挙げられる。発話途中については、「あのう」、「なんか」、「ええ」、「ええと」、「まあ」の5種類を学習者が発話途中に多用する傾向が見られた。学習者の発話末のフィラーには、「はい」、「あのう」、「なんという」などが挙げられた。

全体として、異なる母語を持つ日本語学習者を対象とした先行研究、および母語話者を対象とした先行研究との共通点と相違点が確認された。これは今後アラビア語を母語とする日本語学習者のフィラーについてさらに研究を蓄積する上での基礎となると思われる。

本研究ではフィラーのみを考察したが、分析の過程で、今後はフィラーとあいづちの境界を区分することが必要であるという課題も浮かび上がってきた。また、フィラーを限られた範囲でしか考察できなかったため、今後は日本語母語話者のフィラーの使用実態及び機能を学習者のものと比較し、分析することが必要であろう。また、フィラー指導の教室への導入法、教授法についても考えていきたい。

【付記】

本研究で文字化の際、使われている宇佐美(2011)の記号の説明は以下に記す。

- .. 前の発話文が終わっていないことを示す。
- 、 [全角] 1 発話文の中における日本語表記の慣例の通りの読点である。
- ・ [全角] 発話と発話のあいだに短い間があることを示す。

【参考文献一覧】

- 宇佐美まゆみ(2011)「BTSJによる日本語話し言葉コーパス」(トランスクリプト・音声)2011年版
尾崎明人(1981)「外国人の日本語の実態(2) 上級日本語学習の伝達能力について」『日本語教育』(45), 41-52.

周莉 (2012) 「依頼のロールプレーにおけるフィラー」『日本語文化研究』(16), 17-28.

中島悦子 (2011) 『自然談話の文法—疑問表現・応答詞・あいづち・フィラー・無助詞—』おうふう

山根智恵 (2002) 『日本語の談話におけるフィラー』くろしお出版

ルカムト・ユリアナ・ルジュキ (2013) 「日本語における談話標識について：日本語教育の観点から」大阪大学大学院言語文化研究科博士論文 (未公開資料)

Ward, Nigel (2006). Non-Lexical Conversational Sounds in American English. *Pragmatics and Cognition*, 14(1), 129-182.